

第三回定期大会記念講演

日本人にとってのラテンアメリカ文化の意味

鶴見俊輔

はじめに——天野芳太郎と佐野碩

1942年私は学生でアメリカ合衆国にいましたが、戦争の捕虜になって、ニューヨークのエリス島から交換船に乗せられて南米に行きました。そこでは上陸できませんでした。足かけ3日間、船からリオデジャネイロの街を見ていました。そのときのラテンアメリカとの距離は、それからまる40年たちましたが、私にとっては一向にいまも縮まっているとはいええないのです。

この船にのりあわせた人に天野芳太郎(この話の時には現存しておられたが、その後1982年10月14日に逝去された)という人がいました。パナマで貿易をして財産をつくった人です。一つ船に3カ月も一緒に乗っていたわけですから、天野さんとも何度も話す機会がありました。その船というのが、1500人が一つの船に閉じこめられて、第1階級から第6階級まであるんですね。吃水線から下に3段もあるんですよ。私は第6階級でした。第1階級は外交官です。天野さんも決して階級の高い方ではありませんでした。とにかく天野さんとは何度も話をする機会がありまして、とてもいい感じをうけました。学究的な興味で、暮らしのなかからラテンアメリカに興味をもっている人だったので、その印象は今日も残っています。

そのころ、私の従兄にあたる佐野碩がメキシコに入って、演劇活動をしていました。この人は戦後もついに日本に帰ってこなかった。私がこの人に会ったのは子供のころのことです。佐野碩は1931年に日本を離れています。その前に親類として子供のときに何度か会ったことがあります。佐野碩が日本を離れてからずっと仕事をして、日本の批判者として終わりまで生きたということに対して、私は、天野芳太郎さんに対するのとはちょっと別ですが、敬意をそのころもっていましたし、今ももっています。

リオデジャネイロの沖に船がとまっていた、そこから陸にあがることなく見ていたという姿勢はいまでも変わりません。しかし、天野芳太郎や佐野碩に対してもっていた敬意は、その後の40年間のなかで確かめられたという感じがします。これが今日のお話の主題です。

色メガネは舌にもかけられる

はじめはちょっと違うところに話とはびますが、色つきメガネということをお話ししたいんです。ここには色つきメガネをかけている方——野坂昭如みたいに——おられないですね。野坂昭如は面白い人で、私は一度むかいあって話したことがあるんですが、始めはこうやってうつむいているんです。ビールを飲んで、しばらくしてビールがまわってくると、ずっと眼をあげるんです。色つきメガネというのは、自分をかくすための一種の道具であって、彼は非常に内気ではにかみ屋なんです。それで猛然と打って出るというのは、本来の自分の内気をかなぐりすてて出てゆくので、厚顔無恥な人間とはちがいます。いったん打って出ると割合持久力があるでしょう。内省力を非常にもっている人なんです。私は野坂というのはたいへん立派な人だと思って、今日の日本人のうちで尊敬している1人なんですが、自己顕示欲が自然発生的にあって、それがふあっと出ている人ではないんですね。自己顕示というのも色つきメガネの現象なんです。

さて、色つきメガネのことをなぜとりあげるか、ということですが、C. S. ルイスという人がいます。岩波書店から翻訳が出ている『ナルニア国物語』という長編少女少女物語の作者として、皆さんも御存知と思いますが、C. S. ルイスは童話専門の作家ではありません。彼は神学者であり、また中世期英文学の研究者でもあります。これが彼の専門でしょうね。ですから、中世期の英語、英語の起源ということに非常に通じている人であり、その具体的な中世期英語の研究からある種の意味の理論を組み立てている人です。この人に『プラスペルズとフラランズフィヤーズ』Bluspels and Flalansferes というエッセイがあります。そこで譬えの種類について書いている。カントの先験的図式というのを説明するのに、こう言うこともできる。私が青い色つきメガネをかけて街を歩いているとする。これから向うの街角をふっと曲るとすると、曲った先の通

りで出会う人もまた顔色は青く、青っぽいワイシャツを着ているであろうと期待できる。それがカントの先験的図式だ、というのです。カントの先験的図式というようなことを誰かが言いだしたきに、ああ色つきメガネですね、といって集約することができる。それは、ある種の予言である、という話なんです。譬えのうまく使える場合として、C. S. ルイスはそれを使っているのです。

話はまたとびますが、メキシコの日本人小学校で出している『サボテン』という雑誌があります。とても面白い雑誌です。この雑誌を私は何年分か見たんですが、そのなかに日本に帰った女の子からの手紙がひとつ出ていました。大阪のかなりの大企業に勤めている人の子供さんらしいのですが、それにこう書いてある。日本に帰ってくると、メキシコとちがってパイナップルがおいしいわよ、ちゃんと罐に入っていて、清潔で、とてもおいしい、と書いてあるんですね。私はびっくりした。それから、眼に色つきのメガネをかけられるだけでなく、舌にも色つきメガネはかけられるんだな、と思いました。いったん舌に色つきメガネをかけてしまうと、日本に帰ってきてスーパーでパイナップルを買って食べると、日本はメキシコよりずっと豊かな国だから、そのパイナップルもうまいように感じられてしまう。これは舌が色つきメガネをかけているからなんですよ。感性そのものが変わってくるわけで、まさに、さっきの色つきメガネのある視角での転用というか適用例になるわけです。舌のかけている色つきメガネ——それは大企業に勤めているような、かなりたくさん日本人が、メキシコ人は働かない、文化がおくれている、メキシコのもの鉛筆でもすぐ折れる、というようなことを家庭で言っていると、それがパイナップルの罐詰までできてしまうんですね。このように舌もまた訓練されている。その問題なのです。

メガネをとって肉眼で見よう、そんなことを言おうとしているのではありません。メガネというのはなかなか取りにくいもので、一つ取るとまた別の色つきメガネをみつめてくる。青い色つきメガネをすてて、今度は赤い色つきメガネをかけると、何でも赤く見えてくる。これが真実だなんて言いやすいものですね。

これがインテリの通弊です。学校に長いこといるうちに色つきメガネをかけたいという潜在的願望をもってしまっって肉眼の退化した人たちのことをインテ

リという。これは私流の定義ですが、そう私は思います

だからといって、色つきメガネを捨てて街に出よう、肉眼でラテンアメリカを直視しよう、そんなことを言おうとしているではありません。もうすこし、いくらか論理的にずるく仕組まれた話をしたいのです。自分がいまどういう色つきメガネをかけているかについての自覚をもちたい。いくつかの色つきメガネをかけてテストしてみたい。ときには、はずしてみよう。そういうことをわれわれは必要としているのではないか。そういう提案なのです。

向うから此方を見る——荻田政之助の場合

向うからこちらを見るという努力をしていきたいのです。これは大変にむずかしいことです。私がメキシコに行って間もないころに、荻田政之助という人の家に連れてゆかれたことがあります。そうしたら猫がいっぱいいて、猫の臭いがする。奥さんはもう亡くなっていて、猫と一緒にくらしているのです。奥さんの写真がおいてあって、いつでも奥さんのことを考えている人でした。上機嫌でいろいろ話をしてくれるのですが、自分はオアハカの方の山の中に新しい部落を発見してそこに友達がいる、皆長生きで、何というお婆さんは250歳、その隣の何という爺さんは270歳だ、その人たちと話をしてみると日本とこの文化がよく似ていることがわかる、実は日本から昔移住していった人なんだ、こういう人たちを飛行機にのせて一緒に日本に帰りたい——なんて話をする。私はびっくりして聞いていたのですが、皆さんのなかにもこの話を聞かされた方があると思います。ところが日本の学者のなかには、250歳なんて、そんなに長く生きられるはずはないじゃないですかなんて言って、話の腰を折ってしまった人もいたらしいですね。私は面白い話だと思ったから、とにかく聞いているうちに、話がガラッと変わってくるんですね。最初の20分くらいは序曲なんです。ここはまったくファンタスティックなんだが、それがピタッと終わってしまうと今度は非常にリアリスティックな話になる。ヤキ・インディアンがこうだとか、歯を治療したらこうだった、とか。ですから、まず非常にファンタスティカ・カプリチオーソとでもいうのかな、そういう序曲をワッとやって、それに対するお客の反応をみて、どういう種類の人間なのかをみきわめられるらしいのです。その意味ではきわめて政治的な、ある種のリアリズムをもつ面白い

人でした。

この萩田さんは1898年生れて、1976年に78歳で亡くなりました。1916年に数え年で19歳のときに日本を出て、まずペルーに行って数年くらし、それからメキシコに入って、オアハカに住んで歯医者になった。この人のラテンアメリカに対する接し方というのは、向う側にパッと入ってしまっ、向うから見るという流儀ですね。そういう一種のロマン主義を自分の内部にもっていた。その萩田さんは、いろいろな資料の大変な収集家でした。その学問的な値打ちについてはよく判りませんが、昨年『チョンタルの詩——メキシコ・インディオ古謡』（萩田政之助・高野太郎編訳、誠文堂新光社、1981年）という本が出ました。私は新聞の書評でみて、あの萩田さんが亡くなったこと、萩田さんの集めた資料からこういう本ができたことを知って、びっくりしたのですが、この本は高野太郎という若い日本人が、萩田さんの残した資料のなかから、オアハカの奥にいるチョンタルという部族——まだ3万人くらいいるそうです——で代々うたいがれてきた唄を集めて訳したものです。これが人類学的にどれだけうらづけがあるのか、私には判りませんが、一つの心象風景として読むと、面白い。こういう唄があります。

世界が終わることを神は好む

神は世界を滅ぼすことが好きだ／好きだ　好きだ　好きなのだ／アーイ　神よ

それを鳥たちが気づいた時／うたい始める／うたい始める／そして／神がそれを聞いた時／鳥たちが哀れになって／ふたたびもとのままにする／ふたたびもとのままにする

アーイ　できないのだ／滅ぼすことなどできないのだ／鳥たちによって——

つまり、神は人間があわれだから世界を滅ぼすのではないのです。何度も何度も滅ぼしているんですが、鳥たちが歌うと鳥たちがあわれだから、滅ぼしておいてまたもとにもどす。

ここには大変面白い考え方があります。ヨーロッパ人の思想とはちがいますし、ヨーロッパ人からうけついで日本の近代思想とも全然ちがう角度なのです

ね。これは、始めに申しあげた色メガネ、パイナップルの罐詰について、日本のパイナップルはおいしいわよという、色メガネとはちがうんです。もう一つの色メガネ、つまり別の色メガネをかけて向うからこっちを見よう。そういうものですね。

見田宗介の仕事

いろんな人がメキシコに行っています。そのなかでメキシコの影響をうけた人も何人かいますが、社会学の領域では見田宗介氏の仕事がメキシコ体験からヒントを得ている。メキシコについて語るというだけでなく、学問の枠組みの組み替えをやっているのですね。それは『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』(筑摩書房、1977年)とか『時間の比較社会学』(岩波書店、1981年)のような包括的な著作にすでに出ています。その転機を自分の暮しの気分から書いているのが『青春 朱夏 白秋 玄冬』(人文書院、1979年)という本です。このなかで見田宗介氏は自分のなかにおこった変化を率直に書いています。

見田さんは、私からみれば、若い人で1937年生れ、私は見田さんの写真を早く見たことがあります。戦争がおわってまもないころ、『赤旗』で見たんです。その見田さんの写真というのは大きく出ているので、まだ小学生で、丸い顔して妹と一緒に写っていました。その説明に、この小学生はマルクスを理解した、と書いてある。小学生でマルクスを理解したというのだから大変なものです。それで、こんな子もいるのかと思って私の頭の中に入っていたのです。それから十数年たって見田宗介氏が現われてきたのですが、小学生のときにマルクスを読んで理解したこの人は、やがてだんだんに他のことも学習する能力ができてきて、高校生ぐらいの時からマルクス以外のことも勉強しなければいけないと思うようになり、大学では社会学科をえらんで、アメリカ社会学、近代の社会学を勉強して、それもその技術的な部分、つまりソシオグラムとか統計的な操作とか、そういうものを身につけたのです。だけどこの人物の面白いところ、つまり普通の秀才とちがうところは、マルクスの時代はおわった、これからはアメリカ社会学だなどといってマルクスから手を離してしまわないところにあります。ですからメキシコへ行って変ったあとも、もはや近代社会学ではだめだといって、近代社会学から手を離すこともしない。マルクスから

も近代社会学からも手を離さず、メキシコ的生活感覚にあるものを引きよせて、自分の立場で再構成しようという意欲がある。

小学生のときにマルクスを理解した彼がいったいメキシコに行つてどうなつたかということ、『青春 朱夏 白秋 玄冬』で見えます。

インディアンが近代文明の「思想」を拒否する態度に業を煮やして、北米大陸からのこの「野蛮人」の絶滅を希望していたベンジャミン・フランクリンは……

ここのところは、見田さんは秀才ではあるがフランクリンを良く十分に読んでいないなあ。私は異議があります。フランクリンに対してもうすこし公平でなければならぬので、ここでちょっと私流の注を入れますと、私は一昨年カナダにいたとき、モーホーク・インディアンの居留地に行つたことがあります。このモーホーク・インディアンは次のような伝説をもっている。自分たちは母系の政治社会をもち、酋長は女性がえらぶ。フランクリンは、このやり方、つまり女性が組織する連合という考え方を研究し、これから学び、この考えをフランスに米国公使としてもって行って伝えた。フランス革命はこれによって起つた。こういう伝説です。ここにはまた別のひずみがありますが、モーホーク・インディアンはそうのように信じているのです。これは学問上はいくらかの根拠しかないのですが、フランクリンにそのような著述のあることは確かです。ですから見田さんが、この「野蛮人」の絶滅を希望していたフランクリンというように書くところは、私は賛成できません。それはともかくとして、引用をつづけましょう。

北米大陸からこの「野蛮人」の絶滅を希望していたベンジャミン・フランクリンは、まさしく次のような時間意識において、典型的に「資本主義の精神」と名づけられている。／「時は金(かね)であることを忘れるな。勤勞によって1日10 シリングを稼ぐ人が、戸外を散歩したり、室内で無為にすごして半日を費すとするれば、たとえ気晴らしと安逸とのためにわずかに6ペンスを散じたとしても、それだけを消費したと考えるべきではない。そのほかにも5シリングを、出費したというより、むしろ投げ棄ててしまったと考えねばならぬ」。／「毎日の自分の時間のなかから1グロート銀貨に相当するだけの時間(それはおそらく数分間にすぎぬであろう)を無為にすごすものは、

これを合計すれば1ケ年には100ポンドを使う特権を失うのである」。以上はフランクリンからの引用です。さて、ここで見田さんはメキシコ体験と結びつけるのです。メキシコ中部のパツクアロに行ったときの体験と。

死者たちのための食事を数日もかけて準備し、1日とその墓ですごし、さらにゆかりもない死者のために「余分の1人分」まで用意することは、時間の経済学風にいえば、ムダの上にムダの利息をつけるようなものだ。近代主義者がインディオの生活合理化を計るとすれば、まっさきにそぎ落されるのはこの「余分の1人分」だろう。けれどもそのとき、ある本質的なものが同時にそぎ落されるのだ。

この感想は、あとで『時間の比較社会学』の軸となり、これをもととして、ここからこの本が書かれていきます。時はカネである、というとき、時はまったく数学的に足したり引いたりできるものになっています。均質的な時間とっていいでしょう。そのことによって時は、それまでもっていたある性質を失うのです。それは無視されてしまう。質をもった時間、他の時間によって替えることのできない時間というもう一つの時間が無視され、失われてしまう。

たとえば近代の教育制度は、この均質的な時間のうえに立っていますから、小学校6年生なら国語が何時間で算数が何時間というように決まっていますね。その結果、教育のなかに出てくる偶発的なもの、チャンスというものを活用した偶発性教育は、試みられません。ある子供があることを考えるチャンスをもったときを、教師が見ていてそのときにそれを与えるということが出来ない。数学教育家の遠山啓は「偶然性が生きる社会は健康である」といっています。うまいことを言いますね。おなじ数学者でも、均分というのはちがう時間のとらえ方をしていたのです。ひっくりかえて言えば、偶然が生きないようになった社会は不健康である。偶然性が生きる社会は健康であるというのをひっくり返したら、そうなりますね。ということは、時間が完全にカネと等価となり、時間が1個の単位として加除の対象となっている社会、これはもう人間が生きるに値しない社会になってしまっているのです。

もうすこし普通の言葉にもどりましょう。見田さんの言葉で言えば、色のついた時間ということです。時間には色がある。ランボーみたいな言い方ですが、そこから見田宗介は『青春 朱夏 白秋 玄冬』という本を構想する。青春、

朱夏というような言い方は、中国流の伝統のなかで日本人にとってかなり普通に理解されるものです。北原白秋のような有名な詩人の名にもなっていますし……。我々の生きている時間は色がついている。何歳から何歳までというような切り方はできないにしても、それで見田宗介はこの本のあとがきで、次のように書いています。

青春 朱夏 白秋 玄冬 ということばを、ぼくは好きだ。それはめぐりくる人生のそれぞれの季節を、それぞれの固有のうつくしさににおいて歩みつくすというイメージをぼくたちに与えてくれる。／日本ではこの四季のうち青春だけが美しい季節のように思われてきた。

だが、これには反対だ、と見田宗介は言うのです。これは面白いですよ。さまざまな季節のなかで青春だけがいいという考え方は、さっきの時間の均分ということに結びついています。アメリカから始まり日本にも波及してきた時間の観念は、青春を永遠にしたいというその形而上学においては、何とかしていつまでも若くいたい。おれはまだ若いんだ。おれはまだ青春だ。テレビ・ドラマにも「これが青春だ」なんてのがよくあるでしょう。萩本欽一のプログラムにもよく青春が出てきますね。ああいう気分です。死ぬこと、衰えること、老いることを隠してしまおうとする。いかにも青春だけでこの社会が構成されているような幻想を与える。そういう塗りかえをやる。これが19世紀のアメリカに始まり、一つの文明となって敗戦後の日本に滔々としてきて、高度成長下の日本で主流になっている時間のとらえ方ですね。それに対して見田宗介はこういうんです。

若い人からは、青春をすぎてしまった者のまけおしみと思われるかもしれないが、青春 朱夏 白秋 玄冬、とならべてみると、青春よりも朱夏が、朱夏よりもさらに白秋や玄冬の方が、いっそうすばらしい季節のようにさえ思える。けれどもおそらく、青春を青春としてみずみずしく生ききった者こそが充実した朱夏を迎えるのだろうし、朱夏を朱夏として生ききった者こそが朗々たる白秋を迎え、奥行きのある玄冬を迎えるのだろう。

こういう色のついた時間というとらえ方への転機になったのは、明らかに彼がメキシコに行ったことにある。彼は1974年に37歳で、つまり青春期をすぎたところでメキシコへ行っています。見田さんはメキシコに1年いたほか、ブラ

ジルにも行っているし、ラテンアメリカを広く知っています。『気流の鳴る音』は、「交響するコミュニオン」という副題のように、コミュニオンを書いたものですが、カスタネダによって書かれたヤキ・インディアンの老人の生きる世界の影響も入っています。色のついた時間という考えからいくと、『時間の比較社会学』という本は、その延長線上にあるもので、いまの考え方に社会学の方法を適用して、もうすこし、すじみちたてて述べたものです。ここではメキシコのインディオだけでなく、アフリカのヌーア族などのこともとりあげられています。時計がなくてもやっつけられる、というのです。牛の時間というのがある、共同体のなかでは一つの時間があるので、時計は全然必要がない。共同体の共同の生産。ところが共同体がちがう共同体と出会うとき、ちがう部族と出会うとき、そのときは今までの体内時計とか習慣のなかにある時間では測れなくなってくる。そこで別の時計が出てくる。資本主義の発生期になると、いろいろ強制して時間通りに、パンクチュアルに働かせるという考えが出てくる。というわけです。それで、さっき出てきたベンジャミン・フランクリンと同じように、彼は次のように書くのです。

貨幣がそうであるとおなじに、計量化された時間もまた、〈媒介された共同性〉としての近代市民社会の、再・共同化の媒介である。

言葉は難しいですが、このなかには小学生としてマルクスの『資本論』を読んで学んだ考え方、つまり『資本論』第1巻第1分冊に出てくる、貨幣のなかに労働関係をみるという考え方がもう一遍こだまのように返ってきて、見田宗介がマルクスを手離していないことがよくわかるのです。続けますと、

近代市民社会の内部で「わずらわしい時間の支配」から解放されたいと考えることは、近代市民社会の内部で「けがらわしい貨幣の支配」から解放されようとするということとおなじに幻想的なユートピアにほかならない。けだし「時間」は、貨幣とおなじに、近代市民社会の存立それ自体の影なのである。ここにもマルクスの『資本論』の影が残っていますね。

また話をとぼして日本にもってきますが、現代の日本のお母さんが子供に対してもっともよく使う言葉は何だと思えますか。これも見田さんの本にあるんですが、なんと、これは「早く」なんです。「早く、学校におくれますよ」、「早くご飯食べなさい」、「早く塾に行きなさい」、「早く」、「早く」。これは時間

の呪縛のもとにおかれているからなのですね。サラリーマンとしての彼らの将来を考えて、三つぐらいから訓練しているのです。それで次のような実験もあるのです。おなじ音楽をゆっくりひいたのと、間違いを何度もしながら速くひいたのと子供たちにきかせてみたら、日本の子供たちの反応は、速くひかれた方がうまいというのだそうです。そういう錯覚をもつほどに日本の子供たちは訓練されているのですね。「早く」「早く」とお母さんにいわれつづけて暮らしているものだから、間違いだらけでも速くひかれていれば、ああ上手だなあと思ってしまうような、そういう状況なのです。これは、舌も色メガネをかけられると同じように耳もまた色メガネをかけられるということの一つの証明ですね。

こうしてわれわれはスケジュール化された生命を生きています。ことに確実に出てくるのはローンにおいてですね。ローンというのは自分の行先きをきちんと計量化するわけで、自分が死んだ場合さえも計量化されている時間のなかにおいているわけです。それがわれわれの均質の時間の一種の枠組みですね。それがわれわれの生きているイデオロギーです。

大江健三郎とキメシコ

もう1人、同じようにメキシコに行った大江健三郎の場合を考えてみましょう。大江さんは日本の代表的な作家の1人ですが、メキシコへ行ったのは1976年、41歳のときです。41歳でメキシコの影響をうけるというのは相当むづかしいと思います。やはり、これは年齢によるところが大きい。私がアメリカ合衆国へ行ったときは15歳でした。15歳から19歳のおわりまでいたのですが、わずか4年間だったけれども、これは私のなかにもすごく深く入っているんですね。大江氏の場合には、メキシコに行ったのは、もう41歳にもなってからだったにもかかわらず、彼のなかにメキシコが深く入ったのは、メキシコを準備させるものが彼のなかに早くからあったためです。それは彼の初期の著作にもうすでに伏線として張られています。『ヒロシマ・ノート』とか『沖縄ノート』とかを読まれると判るのですが、響きに応じてあらわれるようにメキシコがあらわれたということですね。もっとも、そのなかで重要なものは、彼には障害のある子供がいるということですね。家庭のなかで子供と一緒に生きるという体験を現実にしてきて、それが『個人的な体験』というような小説の

もとになっています。彼がメキシコに行って感じたのは、それがまさにメキシコ的なものだったので、彼はすでにメキシコ的な想像力というものをよく理解できる状況にあったと言えます。『ピンチランナー調書』という彼の作品は、すでに腹案ができていたのをメキシコにもって行って、メキシコ環境のなかでこれを手入れしているのですね。この作品は新潮社から出ていますが、新潮社の社員がメキシコまで飛行機で飛んでいって、書き入れのあるものをもって帰った。途中でなくしてしまうことが大変心配だったのでしょう。彼の作品でメキシコと真っ直接に関係があるのは『同時代ゲーム』なのですが、私からみると、『ピンチランナー調書』の方はメキシコを経験しながらすぐ書き入れをしていますから、これのなかにはメキシコの風景がじつに鮮やかに出てくる。1人の読者としていえば、メキシコのことを直接に書いている『同時代ゲーム』よりも『ピンチランナー調書』の方が私にとってはよりメキシコ的なのです。

このなかで彼が出しているのは転換というテーマです。転換というのは38歳だった主人公が18歳になる。そして主人公の子供である森が逆に28歳になる。そして転換した2人組になって逃走する。それが抵抗の拠点、ゲリラの拠点となる。そういう話で、荒唐無稽の話にみえるけれども、ひきこまれてしまうと、これを読んでいる間、この小説のなかに生きるという感じがします。

その転換が現実のものとして生きられたとき、それが現代に対する、均質化された、きちんとして時間と貨幣によって統御されている世界に対する、確実な抵抗の拠点となる。この思想なんです。今の私が18歳あるいは10歳の少年に転換し、10歳、18歳の子供が突如として59歳になるとして、このようにお互いに転換したものが互いに相寄ったものが道化集団なんで、この道化集団が自分たちが道化であることを恥じることなく権力の中核と対峙するとき、社会が変わる見込みが生きてくる。私は、大江氏のすべての著作のなかで、『ピンチランナー調査』がいちばん好きです。メキシコ社会のなかにある精神的なエネルギーを彼はうけついで、これをつくった。この話はメキシコについてではなくして、徹頭徹尾、日本の話なんです。これはとても面白いことですね。このようにメキシコを受けつぐ作家が日本にあらわれた。

見田宗介にしても大江健三郎にしても、私からみれば若い世代にぞくし、そ

して社会学と文学の両方の分野でもっとも創造的な仕事をしている人です。その2人に、しかもその余技とか隅っこの方の著作ではなくて、そのもっともすぐれた部分にラテンアメリカが働らきかけているのです。日本をもう一度別の眼で見る、つまり別の色メガネで見るわけですが、そのようにして新しい日本の像をつくっていく、こういうところに意味があると思います。

大江氏はメキシコから帰ってすぐ、ポサーダというメキシコの版画家について「ポサーダと全体の表現」というエッセーを書いています。そこで彼はこういっています。ある社会、たとえば日本の社会の周辺にあるさまざまな少数者、そんなものは日本人の本質とは無関係だというようにそれらを切りすてるのではなく、実は日本人の本質に参与するものとしてとらえる必要がある。ポサーダの絵をみて、そのことが判った、と。ポサーダの絵には、さまざまな奇形、さまざまな奇妙なものが出てきますが、それを本質としてとらえるという、そういうやり方です。日本人の大多数はもう戦後生れて、豊かにくらしているんだから、戦争体験なんか関係ない。広島で被爆した人ももう少数者が生き残っているだけだから、これも関係ない。在日朝鮮人、これも60万人しかいない。これも関係ない。こういうふうに切り捨てていく考え方がありますね。これに対抗して大江氏の出している考え方は、本質というのは周辺にある少数者が関与してできるものだ、ということです。この別の考え方、これをポサーダの版画から学んだというのです。

まなざしの交換

今までの私の話を要約しますと、ラテンアメリカの文化と日本の文化の間に眼差しの交換をつくりだしたいということです。肉眼によっても、また色メガネによっても。さまざまな色メガネをかけることによって、あるいはメガネをかけ、あるいはメガネをはずすことによって。そういう場をつくっていきたい。それは生活者としても、文学者としても、批評家としても、社会学者としても、あるいは工学者としても、またビジネスマンとしても、官吏としても、日本人のあらゆる活動分野で、適切なことだと私には思えるのです。

さまざまな段階があるでしょう。自分自身の眼差しに固執するというやり方もあります。小さいころには、自分の肉眼で見たものが世界のそのままの姿だ

と思っていますね。それに固執する。もう一つは、今の日本でいいますと、アメリカ合衆国の与えてくれた色メガネによって見る。これで日本を見、ラテンアメリカを見るというやり方。これでやると、会社員としても学者としても、相当能率があがる。いろんな文献も使えますからね。しかし、それでいいんだろうか。そこでもう一つ出てくるのは、向うの、つまりラテンアメリカのさまざまなの人たちのメガネを借りて、向こうからこっちを見たらどうなるかをとらえようというやり方です。そしてさらにもう一つの段階としては、それらのメガネをかけて、またはずしたうえで、自分自身の立場に立って考え、見てみる。こういうふうなさまざまな段階が必要だと思います。さきにあげた荻田政之助さんとか天野芳太郎さんとかは、この最後の段階まで行った人たちだったと思います。

天野さんのことは、交換船と一緒に3カ月くらしたという以外のことを私はまだお話ししていませんが、天野さんの生涯について簡単にお話ししますと、天野さんは1898年生れ、つまり荻田さんと同い年です。1928年、30歳のときに日本を出てパナマに行き、そこで儲けてかなりの財産をつくるのです。それで、パナマに天野博物館というのをつくるのですが、日米開戦でそれを捨てて、日本に交換船で戻ってきます。だが戦後、1951年にもう一遍日本を出て、今度はペルーに行くのです。そしてペルーでまたかなりの成功をおさめて、また自分の財産を投じてインカの出土品を集めてリマに天野博物館をつくります。日本の実業家はラテンアメリカに行っても、財産をつくと日本にもってきってしまうのですね。しかし天野さんはそういうことをしなかった。天野さんが自分の財産をつぎこんでやったことは、すでに失われ見すごされてしまっている古代のアメリカ人、つまりヨーロッパ人によって滅ぼされたインカの人たちが、どのように高い文明をもち、どのような志をもって生きてきたかを知ってもらいたいために、それを示す出土品を収集して、それを現地に還元する。それも現地の政府に還元するというのとはちがうのですよ。現地の政府にお金を出して自分の仕事の便宜をはかってもらう——これが日本の平均的なやり方なのですが、明治の半ばから、そんなふうなやり方が出てきてしまっているのですね。金持ちにはもっとカネをやりたいという欲望が、日本の実業家にはあるのですね。

もう10年も前に私は金大中に韓国で会ったことがあります。金大中は、アメリカ人は与党と野党の両方にカネをくれるが、日本人は与党だけにしかカネを出さない、だから韓国人は日本人を憎んでいます、と言うのです。アメリカ人のやり方の方がずるいといえるかもしれませんが、しかし、こういう日本人のやり方は、なぜだか知らないが、もう明治の半ばから定着してしまっているのですね。

そうすると結局、メガネの話とも通じてしまうのです。向うの支配層のメガネを借りてきて、それでその土地を見るということになる。南北アメリカ大陸を通じてアメリカ合衆国がいちばん強くてカネがあるから、そこの政府のメガネを借りてきて見るのが、いちばん能率的ということになる。

天野さんは、このやり方から自由です。だが天野さんのような人はきわめて少ない。そういうところが、日本の財界人ならびにビジネスマンの問題でしょうね。そのように私には思えるのです。

佐野碩の生涯

もう1人、はじめにふれた佐野碩のことにまた戻りますが、佐野碩は1905年に生まれ、1966年に61歳で死んでいます。彼は1931年、26歳のときに日本を出てソビエト・ロシアに入り、メイエルホリドの助手になって演出をした。しかしメイエルホリドはスターリン時代に粛清され、佐野は殺されはしなかったが、国外退去を命じられる。それで土方与志と一緒にフランスへ行き、パリにしばらくいるのですが、土方は日本へ帰る道をえらぶ。しかし帰国するとすぐ逮捕・入獄で、釈放されるのは敗戦後です。佐野の方はパリからアメリカに入ろうとする。だが、入国者のチェックをするニューヨークのエリス島でとめられてしまい、ちょっとの間、上陸することは許されたけれども永住は許されず、また閉じこめられてしまうので、仕方なくメキシコへ行くのです。それでメキシコに上陸しようとしたら、今度はメキシコの日本公使館から阻止されてしまう。日本公使館がああいう人物をメキシコに入れてはいけないとメキシコ政府に働らきかけたのです。彼はベラクルスで船から上れないで、じっと暮らしていたのです。そこである人が思いきって大統領に嘆願書をかくのです。偶然助けられるのですが、そのときの大統領がカルデナスで、日本政府の意向に

反して彼の願いをきき入れて、彼をメキシコに入れるのすが、そのとき彼はすでに34歳、スペイン語は全然知らない。高等学校は浦和でフランス語はできる。ドイツ語も英語もできるし、ロシアに行っていたからロシア語もできる。でもスペイン語はできない。彼の仕事は演劇の指導で、言葉がもとですから、ベラクルスの貨物船に泊っていたときには彼は不安だったと思いますね。言葉ができないのに、これからどうしてやっていけるのか。

それでベラクルスに上陸してから、まずマヤの遺跡をずっと歩いたらしいのですが、それからメキシコ・シティに入ってきます。たまたま彼は非常に性的魅力のあった人で、日本にも妻君がいたし、ロシアにも妻君がいたし、メキシコでも愛人がいた。ウォルディーンというアメリカから離れてきた舞台の振付師で、いまでもなかなか美しい女性ですが、この人を追いかけてまわして、しばらくその人と結婚していた。このウォルディーンのアイデアで「コロネラ」というバレエをやるのを佐野碩は手伝ったりした。日本びいきの人にいわせると「コロネラ」は佐野碩の作品だというのですが、ウォルディーンに聞くと、自分の作品で佐野に手伝わせたものだというのですが、こっちの方が事実でしょう。でも佐野が、このバレエのなかに、さきほど申しあげたポサーダの骸骨の踊りだとか、メイエルホリドゆずりの演劇のテクニクだとか、いろんなものを入れて、これを豊富化する役割を果たしたことも、たしかでしょう。彼はさらにメキシコに近代演劇をつくりだす仕事をしたし、映画もつくります。

彼は、自分を妨害した日本公使館には断じて行かなかった。戦後になって日本の公使館が復活し、大使館になり、それもかなり大きなものになって威張るようになって、公使館、大使館の地域には足をふみ入れない。そういう生涯を生きて死んでしまった。

彼は小児マヒにかかって、片足が不自由だったのですが、大変なカンシャクもちで、丈夫な方の片足1本をコンパスの軸のようにして、なぐりあいをやるのです。相手は片足が悪いからたいしたことはないと思っていると、突如としてポカッとなぐられる。こういうふうにかんりの攻撃力をもった人物で、警察とたたかうという点でも伝説的な人物でした。私が15歳で始めてアメリカに行ったとき、向うで都留重人に会って一緒にメシを食べたら、君の従兄で佐野碩というのがいるだろう、と聞かれました。都留さんのいうのには、彼が高校

生でつかまったときに、警官に、お前こんなに簡単につかまってだらしなないぞ、佐野碩をしろ、あいつは公衆便所に逃げこんで、女に変装して逃げやがったと言われたというのですね。こういう話がどこまで本当か、わかりませんよ。伝説がつくられていきますからね。それにしても、彼は1931年に日本を離れて以来、死ぬまで、ついに日本の官憲にはつかまらなかったのです。

スターリンによってロシアを追われてフランスに行き、アメリカに入ろうとして失敗し、メキシコに入ろうとして妨害されるというように左右の両方から彼は迫害されるのですが、ともかくソビエト・ロシアの共産党から追放されても自分なりの共産主義を生きた、そういう人だったと思います。

佐野碩については、私には立派な人ではないかという子供のときからの思い入れもあるのですが、いろいろ調べてみても、やはりいい人間だという気がするのですね。彼はキューバにも行っていますが、彼の生き方は、メキシコの伝統、もっと広くラテンアメリカの伝統から、力を汲みあげ、さまざまな仕事をしています。

佐野碩の生き方、天野芳太郎氏の生き方、荻田政之助氏の生き方、これらはラテンアメリカ文化との結びつき方という点で今までの日本人の平均的な生き方とはちがっています。日本にひきよせるというやり方ではなく、向うのメガネを借りて日本を見て、日本自身の方から新しい力を求めていくという、そういう想像力の働かせ方なのですね。

日本文化をとりもどす触媒としてのラテンアメリカ文化

ここにおられるので言いにくいのですが、増田義郎氏の『純粹文化の条件』（講談社新書、1967年）は、この間の機微をよく伝えていると思います。ラテンアメリカではメキシコに限らず、ペルー、アルゼンチンもそうでしょうが、ペルーはすさまじいですね。メキシコよりもっとひどかったかもしれませんが、そういうところを考えると、日本の外来文化の受け入れ方とまったく対照的なんですね。日本の文化には、ラテンアメリカであったようなヨーロッパ文明の受け入れの強制ということがなかった。征服がなかった。そのために日本文化は高い外来文化を間歇的に、大規模に、征服や暴行などの痛い目にあうことなしに、したがって自主的自己選択的に集中してとり入れる機会を何遍ももった。

したがって外来文化、舶来というのは日本にとっては明るいイメージをもっています。ラテンアメリカにとってはそうではない。肉体的に自分が白人になっている場合ですら、ヨーロッパの産物を明るいイメージとしてだけ見ることができないんですね。ところが日本では、外国人に接触したことがないから、外国人に対してはきわめて警戒的だが、ヨーロッパ人やアメリカ人のつくった産物については人と切りはなして受け入れる。だから平気で外国風俗の模倣をやっていく。

しかし、このやり方はこれからもずっとつづくかどうか。ということは、ラテンアメリカ風の問題はすでに日本のなかにもちこまれているということです。われわれは敗戦を通過してきたし占領を通過してきた。今もアメリカから核の受け入れを強制されているし、軍備を増強しろという強制も受けています。それらは別の条件が日本にできているということを示すものであって、ラテンアメリカの異文化受け入れを日本とちがう対極的なものとしてこれからもすぎてゆくのではすまない別の状況が日本にできている。われわれはラテンアメリカから学ばなければならない。こういうさまざまな問題がここに出てきているのです。

若い時代から本当に長い間モダンボーイとしてヨーロッパ映画とくにフランスやイタリアの映画の輸入・紹介・批評・研究に生涯をついやしてきた飯島正という人がいます。その飯島正がほとんど最後の著書として『メキシコのマリントチェ』（晶文社、1980年）という本を書いたというのは、一種象徴的な出来事だと思います。飯島正は1902年生まれですから、いまは80歳、そして日本の代表的なヨーロッパ映画の批評家、研究者だったこの人が、フランス映画で何がいいか、ルノアールがいいとか、いやゴダールだとかから眼をはなして、最後はメキシコのマリントチェについて書く。マリントチェというのは、歴史上はじめてコルテスとの間に白人とインディオの混血児を生んだ人でしょう。飯島正のような人が80に近い年になって、肉体そのものが白人に化した有色人種系の人間としてのメキシコのマリントチェを書く。これは一種の象徴であるように思います。

日本文化をとりもどすための触媒としてラテンアメリカ文化がある。そういう状況がいまぎっている。われわれにとっては、ラテンアメリカ文化のさまざまな流儀を学ぶことを通して、われわれにとって切りはなされかかっている戦争

体験、原爆体験、日本にひき寄せられてここに生きている在日朝鮮人の体験、占領体験、それらをもう一度われわれの本質として組立てるという別の問題をいま突きつけられている、というような気がするんです。

そのように、われわれはエキゾチックなものとしてではなくリベラとオロスコを、ポサーダを見ることができる。そのようにラテンアメリカの小説を読むことができる状況に、いま始めて達した、というように思うんです。前に申しあげたパイナップル体験、これは戦後高度成長下の一つの可能性でしたが、この新しい状況は、それとはちがう道をわれわれがとりうるということを示しているのではないのでしょうか。

野村浩一は、日本は近代化することによってアジアから手を切ったといっています。これを引いて松本健一という若い批評家は、完全に手を切った時期を1964年とした。東京オリンピックの年ですね。このときにわれわれ日本人は完全に近代化したという評価をした。つまり日本にやってくるアメリカ人は、もう日本人ほどにカネを落さない。ホテルのお寿司屋さんなんかも「アメリカ人て駄目だね、もう、カネねえから」なんて言っている。タクシーの運転手もそう言っています。カネのあるなしで評価する。近代化というのは、そういうものです。そういうふうにしてアメリカ人を見るようになった。総理大臣(大平さんですが)までが、いまやアメリカはワン・オヴ・ゼムになったと言う時代がきたわけです。日本がヨーロッパ・アメリカ諸国と同列にならんだという意識を、日本人の大衆も官僚も政治家ももつ時代がきた。その次にいったいどこに行くのか、それが問題ですね。

この近代化の道はそれほど長くはつづかない。これの行きづまりがくるだろう。だがそのあとも人間は全部が死に絶えるわけではなくて、核戦争があるにしても生きのびる者があるでしょう。そして核戦争を阻止することは、今の近代化の道を保留なしに突っ走ってはいは難しいでしょう。この日本の未来を考えるのに、ラテンアメリカの文化はわれわれにとって重大な手がかりになると思います。

ですからアメリカ合衆国からもらった——いや、もらったのではないんです。ね、借りている青いメガネをかけつけて、これが本当に顔面にビルト・インされてしまって、鉄仮面みたいに顔にはりついて外せないということになった

ら、これは具合悪いですね。実業家でありサラリーマンであり官僚であるとするれば、このメガネを全然かけないわけにはいかないかもしれません。私はこれを捨てろと言おうとしているわけではありません。ただ、時にはこれはずしてみる。そういうことをわれわれは必要としてはいないか。これが今日、私の言いたかったことなのです。